韓國百濟の扶餘寺址を中心として観た一塔一金堂形式の変化¹⁾THE CHANGE OF SINGLE PAGODA-IMAGE HALL PATTERN
OF THE BUDDHIST TEMPLE SITES AROUND BUYO,
PAEKJE KINGDOM

金 聖 雨*

KIM, Sung Woo

The pattern of single pagoda-image hall, typical site design of Buddhist temples of Buyo period (538-663 A.D.), was not a fixed pattern, but was in a process of continuous change. This can be identified by the change of size and material of pagoda, relative dimension of cloistered corridor, and arrangement of belfry, sutra repository, and lecture hall. The examination of such changes enable us relocate the periodical positions of the sites with unknown dates, and understand the background of the changes.

Keywords : *site pattern of single pagoda-image hall, temple sites of Buyo, change of site design, Buddhist architecture*

一塔一金堂形式, 扶餘寺址, 配置変化, 佛教建築

1. 一塔一金堂形式 (序)

韓國の古代佛寺址の中で最も時期が早い例等が高句麗の寺址等である。高句麗の寺址が一般的に一塔三金堂形式であると知られているのは清岩里寺址が三金堂形式と報告された以後, そのような形式が高句麗の典型的なものに見做されてきた傾向に基因するところ大である。然し清岩里寺址は5世紀末(498)の事例で, それ以前の寺址等は全部清岩里寺址と同じ三金堂形式であったと断定することは出来ない²⁾。古代佛寺建築に於いて, その配置計画は時代の変化に従い, 甚だしく力動的に変わり同じ形式に見えるようであっても, その中に絶えず変わる内部的変化要素等を抱えている。

清岩里寺址以後6世紀の高句麗寺址に對してはこれ以上知らされた報告資料がない。6世紀の変化傾向は百濟と新羅の寺址等で確認される。新羅では皇龍寺址が発掘され三金堂形式が清岩里寺址とは又異なる形式で建てられたのが確認される³⁾。然し, 知られた他の寺址等の報告資料に依れば6世紀全体に至り最も普遍的であった配置形式は三金堂形式でない一塔一金堂形式であった。

6世紀を前後した一塔一金堂形式を最もよく代辯してくれる事例が扶餘にある百濟寺址等である。6世紀中葉から7世紀前半まで一塔一金堂形式の寺刹が建てられた例が扶餘とその周辺にて探し出される。日本統治時代に調査報告された軍守里寺址と東南里寺址があり⁴⁾光復後我等の手に依り發掘された定林寺址と金剛寺址がある。その後全北益山にては一金堂と三金堂形式を同時に見せてくれる彌勒寺址が調査報告され最近の發掘事例として陵山寺址が追加されている。

百濟寺址として公州のような扶餘以外の場所にも寺址が調査さ

図1 清岩里寺址

れたことはあり⁵⁾扶餘に於いても前に述べた寺址でなく他の寺址が調査されたことはあるが配置計画が確認されない限り本論文で詳しい言及は意味がないから省略する。統一前の新羅の寺刹芬皇寺は三金堂であったことが確認され⁶⁾, 興輪寺の配置は詳しくは知らない。

それ故に6世紀の一金堂形式の展開が百濟の扶餘に局限されたものではないが配置計画の変化を論ずるに足るだけの資料が確認された場合を取扱うには扶餘寺址に局限する結果となる。このように時期と場所に於いて制限された範囲であるが扶餘の寺址等から一塔一金堂形式の変化内容と流れを点検してみなければならない。むしろ地域的に局限される事実が精密な比較検討を容易ならしめる条件にも成り得るのである。論議の展開のために必要となれば中國と日本

* 韓國, 延世大學校工科大學建築工學科 教授

Ph. D. Prof., Dept. of Architectural Engineering, Yonsei University, Seoul, Korea

の根據を部分的に含める必要はある。

今までの古代佛寺の研究に於いて扶餘寺址と言えば一塔一金堂と
いい配置輪廓に對する形式的命名の線を越えて更に細密に変化の
内容を追跡しようとする企てはなかった⁷⁾。然しながら同一一塔一金
堂形式と言えども全部同じものではない。その形式が維持される期
間内でも絶え間ない変化の動機が作用して大きな全体的形式を変え
なくとも細部的変化の証據等が現われる。このような変化が確認さ
れ説明されることは全体的形式の変化を説明するのと連關されてい
てお互いを必要としている。本論文はこのような細部的変化に對す
る確認と背景的理由を見出すことである。同時に扶餘の寺址等は
大部分建立年代が確認されない状態であるが故に、このような細部的
変化を追跡して寺址等の發展系譜を時代順に摺みたいものである。
このような細部的変化の流れは先に述べた高句麗の清岩里寺址以後
から7世紀中葉の双塔が出現するまでの内在的变化過程を説明する
結果となる。

2. 扶餘寺址

扶餘寺址等の内部的变化内容を点検する前に寺址自体に對する輪
廓が簡単に紹介される必要がある。軍守里寺址と東南里寺址が今世
紀前半に日本人學者達に依って調査報告された。

軍守里寺址に於いて直四角形の回廊内部に4角木塔址と金堂址が
見付かり北側回廊に講堂址と鐘樓と經樓と見られる小さい建物址が
講堂左右に位置されたものと報告された⁸⁾。金堂址の左右に回廊越
しに又異なる建物址が確認されたが用途は明らかにされなかつ
た⁹⁾。

図2 軍守里寺址

東南里寺址は扶餘の南側にて採し出された。發掘報告に依れば寺
院の全体的な輪廓は軍守里寺址と同じだが塔が無いのが最も著しき
特徴であった¹⁰⁾。配置輪廓から見れば金堂址南側に塔が入る空間が
ないことから見て始めから計劃されなかったことと見做すべきであ
る。他のすべての百濟寺址は勿論であるが古代佛寺建築に塔のない
場合が殆んどないために稀な例である。中央の金堂は軍守里寺址の
場合より規模が大きく講堂及びその左右の建物址の配置は軍守里寺

図3 東南里寺址

址と同一の形式であった。

金剛寺址は扶餘の西北側に位置して1964—69年間に發掘報告
された¹¹⁾。金剛寺址の異なる点は他の寺址達と同じく南向きでなく
東向きであることと規模と配置状態が軍守里寺址と類似している点
である。軍守里寺址と異なる点は軍守里寺址と同じく講堂左右に建
物址が確認されなかった点である。そして微細な差異点としては金
剛寺の金堂が更に少し回廊の中心に位置して金堂と講堂との間の距
離が軍守里寺址より今少し長いとの点、金堂の平面が軍守里より更
に正四角形に近い点等が確認された。講堂後側に僧房址が確認され
た点も他の寺址等と異なる配置の形式であった。

図4 金剛寺址

定林寺は扶餘市内にあって1980年に調査された¹²⁾。定林寺は現在
も残されている五層五塔で有名である。塔の規模は大きくないが石
塔の造形的處理が拔き立てている。定林寺の回廊は他の何れの寺址
よりも南北に長い直四角形の形をしている。講堂の規模は金剛寺や
軍守里寺址と似ていて金堂の規模と平面は金剛寺の場合と似てい
る。ここに於いても講堂左右の經鐘樓址は確認出来なかった。

彌勒寺は扶餘から南方に離れた益山郡にある。この寺址は他の寺
址と同じ位置に置いて検討すべきかが問題となり得る場合である。

図5 定林寺址

一塔一金堂が3つ並んで配置された例で一塔一金堂であると見られる反面三金堂三塔であるとも見られる¹³⁾。三つの一塔一金堂の院の中央にある中院が左右の院より規模が大きく中心的である点から見て中院だけを相対的比較の対象に検討する程度が適当である。講堂、僧房等の配置方式は多く異なるため同じ配置形式の流れとして比較することは難しい。前に紹介した寺址は皆建立年代が不確実である。彌勒寺も不確実であるが武王代（600—641）に造られたことが確実であるだけに7世紀前半の寺院であると記憶されるべきである¹⁴⁾。

図6 彌勒寺址

最も最近調査された寺刹に陵山里寺址がある。1972年に発掘され、1996年現在でも調査が進行中で未だ報告書が刊行されていないので詳しい事項までは知り得ないが全体的配置が一塔一金堂であることは確実で大略的配置図が紹介された¹⁵⁾。軍守里寺址と似通う形式の木塔址と金堂址が確認され、講堂及びその左右の建物址そして東西回廊の北端に連結された建物址があったことが調査された。重要な事実は陵山里寺址の場合建立年代が推定される根拠が確実であるとの点である。木塔址の心礎で発見された石造舍利龕に刻まれた銘文に依れば百濟昌王13年（567）造成されたことが確認された¹⁶⁾。

図7 陵山里寺址

以上の6つの扶餘周辺の寺址等の中で金剛寺と彌勒寺を除いては寺名が明らかにされなかった。又陵山里寺址以外は正確な年代を知らない。これらすべてが百濟が扶餘に都を移した538年から百濟が滅亡する660年の間の建築であって、およそ6世紀中葉から7世紀前半の間の期間と見做すべきである。各寺址等に對するもっと詳細な情報が紹介される必要性もあるが紙面の制限もあるばかりでなく、これからの論議にて必要な内容が重複されることもあり得るため簡略な紹介程度に留める。以上の6つの寺址に關する資料を根據に一塔一金堂形式内での變化内容とその過程を經鐘樓址、回廊、塔等の變化内容を含んだ項目に従い、検討するのが次の課題である。

3. 塔

6つの寺址を塔に限り検討して見ると差異点が現われる。先づ塔の材料が木塔と石塔の二つの場合が現われる。軍守里、陵山里、金剛寺及び彌勒寺の中院にては木塔があり、定林寺と彌勒寺の東西院にては石塔があった。木塔よりは石塔の場合の規模が小さい。定林寺と彌勒寺以前のすべての古代寺址は全部木塔であって、又定林寺と彌勒寺以後統一新羅にては石塔が主流を成している。従って定林寺と彌勒寺に於ける石塔の出現は佛教建築史での重要な意味を持つのである。

扶餘寺址にては當然木塔の場合が石塔より年代が先んずる。木塔系列と石塔系列内での年代的前後はもう少し論議すべき問題であるが一旦軍守里寺址、金剛寺、陵山里寺址が定林寺と彌勒寺よりは時代が先んずると見るべきであり、これは既に知っている年代に關する情報とも符合するのである。

塔の相対的規模を比較するために、塔の大きさと回廊の内幅との比率を數値化してみると次の表1のようになる。

この表によると、軍守里寺址—陵山里寺址—金剛寺址の3つの場合は、わずかな差異を見せているし、少しずつ減少する。即ち、塔の規模が少しずつ小さくなるという意味となる。それに比べて定林寺址はずっと規模が小さい石塔にして、比較數値が著しく落る。ただし、彌勒寺址の中院の場合は軍守里寺址より大きく、東西院の場合軍守里寺址と同じ數値となる。即ち、彌勒寺址を除く残りの寺址では塔の規模が縮小される傾向を見せているが、彌勒寺址はその縮小傾向が多少例外的な場合として把握される。それは彌勒寺址の中

表1 塔基壇規模比較¹⁷⁾

	塔材	塔基壇1辺長さ/東西回廊幅
軍守里 寺址	木	0.26
陵山里 寺址	木	0.24
金剛 寺址	木	0.19
彌勒寺 中院	木	0.29
東西院	石	0.26
定林寺址	石	0.05

院と東西院の両方の数値が高いことから認められる如く、3つの院が並んで配列されることによって1つの院だけで構成された寺刹より空間の余裕が少なくなるしかできなかった特別な場合として理解されるだろう。

このような塔の規模の比較に先んじて、前述した塔の材料上の先後関係と連繫させてみると、彌勒寺の場合が特殊な場合であることを勘案すると石塔を持っている彌勒寺と定林寺の建立年代が残りの寺址より後になるという事実と食い違わない。彌勒寺と定林寺の年代断定の問題に於いてもこのような相対的数値比較に依れば彌勒寺が定林寺よりも先んずるという假定が成り立つのである。これは塔の規模縮小の側面からもそうであり、彌勒寺に於いては中院に木塔が残されている事実からしても後押しされる。一塔だけの塔が石材で造られて定林寺に於けると同様に規模が縮小されるのは、その時までの塔の流れからして劃期的であるほどに大膽な試みであったと言える。

このような塔の相対的規模縮小の傾向を如何に解釋すべきかの問題が残る。前に紹介した高句麗の清岩里寺址は塔の中心的機能と象徴価値の優越的位置が確かに確保された場合であった。軍守里寺址以後の一金堂形式の登場自体が塔の金堂に対する相対的重要度の減少を前提として始めて可能な形式であった。塔の比重が弱化する反面金堂の比重が強大する背景が一塔一金堂形式を生成した要因であったと同時にこのような堂と塔の相対的比重の変化は印度佛教の中國化過程とも理解されるべきである。舍利崇拜中心の印度佛教傳統が佛像崇拜中心に移動しながら建築的にも中國式中心正殿の形式へと代置されて行く過程が理解できる。

一塔一金堂の形式を同一に持っている佛寺址内に於いても塔の規模縮小傾向が明らかに現われることは塔の相対的機能減少傾向が6—7世紀を前後して佛寺の配置及び建築計劃の変化を主導する重要な要因であるのを見せしてくれる。軍守里寺址だけにしても塔と金堂が或る程度對等の位置を守ってくれるがこれは定林寺に於いては比較にならない程に塔の規模が萎縮されたのである。このような傾向が7世紀後半に至っては遂に双塔の出現にまで繋がるようになった¹⁸⁾。

塔と關係して一言及する必要がある場合が東南里寺址のことである。7世紀以前の韓國に於ける古代佛寺にて塔のない唯一の例が東南里寺址である¹⁹⁾。この場合は背景説明が難しい特殊な事情に依る事例と見る外はないだろう。但し6世紀の塔の比重減少傾向の影響で塔がなく金堂だけでも佛寺が可能だとの考えが實踐出来る例として見る事ができる。然しやはり東南里寺址のみが持つ特殊な理由に依るものと見る方が安全であろう。

4. 回廊

塔の変化傾向は比較的顯著に現われる方である。金堂の場合は塔と同じ程度の変化趨勢は確認されず、寺址毎の多様性が塔より強い。一般的には直四角形の平面から正四角形に近い平面に変化して行く傾向は明らかに目に付くがそれも規則性を持つ程度ではない。金堂平面の規模や回廊規模との相対的比例、やはり比較的多様に現われる。即ち金堂の場合は塔よりは寺址毎の状況と目的に従い、多様に計劃される程度が高いと判断される。

又、他の変化の内容から検討される部分は回廊である。回廊の建築的な側面は情報が不足して論議されることが出来ないが回廊の全体的な規模、特に縦、横辺の比例が問題となる。

清岩里寺址に於いては、回廊址の全体的輪廓が確立されていないが三金堂を取り囲む回廊があった事実は疑う餘地がなく、三金堂の配置形態から見て回廊が相当に正四角形に近かったものと判断できる。三金堂から一金堂に変わりながら回廊の輪廓も変わらざるを得ない。そして一塔一金堂形式に変わった後にもすべての寺址が同一の回廊の東西辺比例を維持しないで寺址毎に異なる比例を持っている。このような差異を無意味なものと、ほったらかすことも得るが、何の背景的理由もない変化はないとの立場から小さい差異が如何なる共通する傾向を持つかそしてその変化の理由が何であるか点検する必要がある。

軍守里寺址は建物址よりも回廊址がより多く破損して全体輪廓が確然と現われるものではないが瓦のかけらと残された礎石に依って復元された回廊の規模は長い辺が260尺で、短い辺は220尺であった。短い辺に対する長い辺の比率は1.18である。東南里寺址は軍守里寺址より回廊輪廓がはっきりしていてその長さは南北方向が220尺にして東西方向の236尺より短い。その比率は0.93であるが東南里寺址の場合は塔がない場合であるからこの比例数値も異なる角度から解釋すべきである。金剛寺址はその比率が1.22(245尺×200尺)あり、定林寺址は1.59(83.5M×52.2M)である。彌勒寺址の配置形式が異なるため問題となることがあるが一旦中院の比例は1.29(190尺×246尺)になる。陵山里寺址は正確な数値が出されていないが、配置図上の長さを計り比例数値を求めると1.26となる²⁰⁾。この数値等を少ない方から羅列すると次の表になる。

表2 回廊長短辺比

寺址	値数	比率(長/短邊)
東南里寺址	236×220尺	0.93
軍守里寺址	220×260尺	1.18
金剛寺址	200×245尺	1.22
陵山里寺址		1.26
彌勒寺中院	190×246尺	1.29
定林寺址	52.2×83.5M	1.59

この結果に依れば回廊の長短辺の比率が略に一定して増加する傾向を見せてくれる。この増加傾向を塔の数値減少傾向と比較して見ると金剛寺址と陵山里寺址の順序が変わることと彌勒寺址の場合以外は皆一致している。陵山里寺址の数値が正確でないことと彌勒寺

址が特殊状況であることを堪案すればこの二つの変化傾向が略に一致するのが確認できて、この事實は相当に興味あることである。

回廊が少しずつ、縦軸線に沿って深くなる傾向は明かである。これに對してその理由を説明する根據は別にない。併しながら幾つかの背景的理由は推定できる。その一つは我ががよく知っている通り、清岩里寺址と同じ5世紀までの回廊は三金堂と塔の配置状況から見て縦軸方向に長いよりは正四角形に近いが反對に横方向に長ければ塔と堂を取り巻くことができる²¹⁾。このような状況をよく見せてくれる寺址が日本の飛鳥寺である。飛鳥寺は6世紀末を前後した場合であるが5世紀の清岩里寺址がこのような回廊の姿に近かったことは疑う餘地がない。

図8 飛鳥寺址

一金堂に変わった後に回廊が急に縦方向に長い平面を持つようになるよりは5世紀の姿から漸進的に変わったために、一金堂形式となった後にもその漸進的变化の慣性が繼續していたと見ることが出来る。

一方、清岩里寺址では塔が中心にある求心的中心がはっきりとした配置であったが一金堂に変わった後は、そのような求心点としての中心がなくなり、金堂と塔を繋ぐ中心軸が配置の基準となるに至った。このような求心点の配置から縦軸線の配置に移動しながらその移動が急激に成されるよりは緩慢に移動しながら回廊の姿がそのように変わったとの解釋も同じ結果を見る異なる観点と成るのである。

中心点の構図から中心軸的構図への移轉は古代建築に於いて佛所に局限されることでなく、或る程度は建築史の変遷上の普遍的傾向として現われる。この点をここでは事例を挙げて証明することは、制限された紙面で許されないがこの問題は單一中心的宗教的崇拜構図に社會的關聯性と水平の人間の位置移動の比重が大きくなるにつれて生ずるしかなかった自然な変化と理解されることもあり得るのである。この問題は章を改めて又論ずることにする。

5. 講堂及び經鐘樓

軍守里寺址と東南里寺址では北側回廊に講堂及び經樓と鐘樓に考えられる二つの建物址が確認され陵山里寺址にても似通った類型の建物址が探し出された。講堂の用途は確實であるが經鐘樓の場合こ

れらの左右の建物址が經鐘樓と確認されたのではない。但し經鐘樓以外に他の可能性が知らされていないためにそのように假定して論議を展開しても無理はなからうと思う²²⁾。とにかくここで重要なことは機能だけでなく、配置計劃の変化である。

軍守里、東南里、陵山里以外の寺址に於いて講堂はあっても左右の建物址は探し出せなかった²³⁾。即ち經鐘樓の有無により、二つの分類に分けられる。この区分は明らかに時代的前後關係と關係があるもので、經鐘樓が講堂左右にある軍守里、東南里、陵山里寺址の場合が時代的に先ずることは今までの論議と相關して考えても疑う餘地がない。三つの建物が一つの連結された單位として、同じく移動されたが終りに講堂だけが残し、左右の建物は再び位置移動をしたのである。

經鐘樓が附いている三つの寺址の中で經鐘樓が配置されている姿と規模が、互いに若干の差異があった。軍守里寺址と陵山里寺址の場合が東南里寺址より相對的の規模が大きい方である。同時に東南里寺址の經鐘樓は東西回廊と外郭線が一直線に合せてあるが他の二つの寺址では建物址が回廊の外郭線外に突出するよう配置されている。

このような差異点を解釋するにあたり軍守里と陵山里の場合が東南里より時代が先ずる可能性が更に高いと考えられる。それは後代の經鐘樓が軍守里と陵山里寺址の經鐘樓より規模が小さいのと軍守里寺址と陵山里寺址に於いては清岩里に於けると同じ三つの建物群が回廊外に配置されていた姿に近いままに移動してきた段階にて規模と位置変化が容易でない場合に見えるに比して東南里寺址にては經鐘樓がその後に再び回廊の外郭線と一致するよう配置が再び調整されたものと理解されるためである。軍守里寺址と陵山里寺址との間でどちらがより先であったかの問題は經鐘樓の配置様相だけでは判斷し難い。

7世紀初めを前後して造られた日本の四天王寺の場合を見ると經鐘樓が扶餘の寺址等よりも縮小されたまま、回廊の北側に移動されているのを見る事が出来る。

図9 四天王寺

6世紀中葉まで講堂左右にて回廊の一部役割をした經鐘樓が回廊外に移動して回廊には講堂だけが残されることが6世紀後半にあった変化であると推測するようになり、このような過程にて定林寺、

金剛寺、彌勒寺に於いては講堂左右に經鐘樓が位置しなくなったことと考えたいものである。

ここに於いて再び清岩里寺址の配置をふり返ると、三金堂の北側に三つの建物址が報告された²⁴⁾。(図1 参照)。この建物址等の機能が何んであるかは知られていないが他の寺址等の例を総合して見ると經鐘樓がこの三つの建物の中に含まれている確率は高いようである。清岩里寺址に於いて先に述べた飛鳥寺と同様に三つの金堂と塔が回廊で取り囲まれていて北側の三つの建物址はやはり飛鳥寺に於けると同様に回廊外に置かれたのは間違いないと考えられる。そうだとすれば6世紀になって一金堂形式に変わりつつ、講堂と經鐘樓が、回廊の一部として編入されたとの事實は少なからぬ変化であった。講堂と經鐘樓の三建物が一つのセットとして一緒に移轉されたことは清岩里から三つが一緒に結ばれた単位と一緒に移轉されたものと見做すべきである。

何故、この建物等が回廊外にあって回廊の一部として北側に置かれるようになったかは、知らされていない。一つの假定は当時中國の宮闕制度の影響でないかという点である。即ち三朝制度という宮室配置計劃の傳統が影響を與えたものと考えたいのである。三朝制度は縦、横兩方向に三つの建物が並び配置される空間の形式にて、時代に依り、多少差異があった。例を挙げれば6世紀の東魏(534-543)には東西の横列に三殿のある三朝に再び縦に反復する二組の建物群があり、このような方式は後期隋唐代以後には縦列三朝制度へと發展する²⁵⁾。

このような宮闕建築の形式と當時何かの相關關係があったのではないかと推測をするようになる。經鐘樓と講堂の配置も三朝の影響であると同時に塔、金堂、講堂の配列も三朝が成り得るためである。宮闕に於いての縦横三朝形式で配置されている姿が一つのモデルとなり講堂と經鐘樓が回廊外に別に位置しないで中心領域の一部として編入された可能性を考えるようになる。この問題は当時の宮闕配置が確認される前には容易に証明されることではないが、影響を與えた一つの可能性としては十分な説得力があると考えられる。

又、一つの背景的假定があるとすれば寺院の概念と性格に於いて変化が講堂と經鐘樓の配置に影響を與えた可能性に関するものである。講堂と經鐘樓が塔と堂よりは宗教的象徴性の比重が弱いが中心回廊内に編入された事實は從來の崇拜對象安置場所という寺院の概念が人間の活動場所としての概念に多少変質されるために可能であったかと考えられる。特に、講堂のように人の活動を盛る機能が重要な空間に編入された点がそのような考えをさせる。

6. 扶餘寺址の変遷 (結)

このように扶餘寺址の始まりは講堂と經鐘樓が北側回廊に編入されるに始まりそのように成るに依り塔と金堂の象徴的優越に對する勢力争いが本軌道に至ることになった。一塔一金堂形式の後半部、即ち7世紀以後の寺址に於いては即ち塔の弱勢が明らかに現われることが即ち確認された。

扶餘寺址の始まりはこのように堂塔の對立的相互關係の変化過程中に塔の優勢が維持された終りの段階にて出發する。金堂が三つから一つになった事實は分散されずに集結された金堂の位置が塔に對して本格的で對等な位置を占居するに至る空間的位置を占有したと理解することが出来る。そして講堂と經鐘樓の編入により寺院の全

体的性格が崇拜對象の安置場所の概念から人間の活動場所への性格がもう少し加味されてゆく過程とも理解される。求心的中心性の強調される正四角形の平面から垂直的中軸性が強調される平面への変化もこのような宗教的意味変化を建築的に表現される過程に於いて必要な変化であった。

このような一連の変化の背景が先に論議した塔と回廊、そして講堂—經鐘樓の配置変化から正確に始まるのである。塔の規模縮小と材料の変化が塔の象徴價值の変化を最も直接的に代弁して講堂と經鐘樓の編入及びその位置、そしてそこに付隨する回廊の平面上の変化が寺院の性格変化と直結される。扶餘寺址の理解はこのような時代的、宗教的変化が建築的变化として招來される過程上の一段階と理解されるべきである。

塔の変化を追跡しながら我我はその変化の順序を軍守里寺址—陵山里寺址—金剛寺址—(彌勒寺址)—定林寺址の順序を立てた。一面回廊の長短辺比からはその順序を東南里寺址—軍守里寺址—金剛寺址—陵山里寺址—彌勒寺中院—定林寺址の順序を立てた。東南里寺址は塔のない特異な場合であるため、回廊輪廓の意味をやはり特殊な場合と見做すとき、回廊の変化順序は塔の変化順序と殆んど一致するが金剛寺と陵山里寺址間の順序だけが変わる。講堂及び經鐘樓の問題に於いては、軍守里寺址、東南里寺址、陵山里寺址の場合が金剛寺址、彌勒寺址、定林寺址より先んずると見るとこの結果やはり先に論議した順序と一致する。金剛寺址だけが塔と回廊の比較結果に於いては異なり、後に遅れる差異を見せる。そして經鐘樓の配置模様から見て軍守里と陵山里寺址が東南里寺址よりも先んずると推定した。以上の推理過程を綜合して図表化すると表3のようである。

表3 変化の順序²⁶⁾

	変化の順序
塔	軍守里-陵山里-金剛寺-(彌勒寺)-定林寺
回廊	軍守里-金剛寺-陵山里-彌勒寺-定林寺
講堂 經鐘樓	軍守里-陵山里-東南里-金剛寺-彌勒寺-定林寺

このように見ると軍守里寺址が一番先で彌勒寺と定林寺が順に後に建てられたという事實は殆んど確實となる。陵山里寺址、金剛寺、東南里寺址の3寺址の間では塔と經鐘樓の問題を考慮するとやはり東南里寺址が先んずると考えられる。このような推理結果に従えば軍守里寺址—陵山里寺址—東南里寺址—金剛寺址—彌勒寺址—定林寺址の順序に歸結する。

ここに於いて陵山里寺址が567年であるとの絶対年代が確實で彌勒寺が7世紀初葉であると見るとこれに合わせて他の寺址の年代を大体推定することが出来る。即ち軍守里寺址は567年以前で6世紀前半前後に建立されたとする假定が間違いなくて、東南里寺址は金剛寺址が567年以後、6世紀末までの6世紀後半に固定できる。定林寺は7世紀前中期の或る時で7世紀初葉の彌勒寺より後と見るべきである。

このような年代順序の推定が絶対的に正しくただけではないかも知れないし、又必ず正しくなければいけない理由もない。これは飽く

まで推定作業であり事実確認作業に成り得ない。然し、今まで我がが論じた論議の文脈と建立年代推定の順序がよく符合し、その順序の推定がこの時期の配置変化説明に有力な根拠に作用されるのを見るとき信頼性のある假説と受け入れて何の問題もないだろうとの考えがする。

扶餘寺址に於いて一塔一金堂形式はこのような変化過程と変化の内容として理解される時、もっとも確實に把握できる。一塔一金堂形式は一つの固定された配置パターンであるとだけ見ることはできない。塔と金堂が回廊内に一つづつ入っているという事実だけは共通のであるがそのような共通点以外の他のすべての配置条件は固定的でなく、大変力動的に変わっていた。その変化の動機も或る程度明らかで変化が指向する方向も今までの論議にてわかる程度にその輪廓が明らかに現われた。金堂と塔の数が変わる程に浮き上がらないにしても、一塔一金堂形式という配置形式自体を力動的変化過程上にあった形式であると規定しなければならない。

註及び参考文献

- 1) 本論文は1989年12月「大韓建築學會論文集」に載せた筆者の論文「一塔一金堂形式の發展」を論旨を修正し資料を補充して、新しく整理したものである。
- 2) ここに關しては筆者の論文「高句麗佛寺計劃の変遷」「大韓建築學會論文集」(1988年10月)にて詳しく取り扱っている。
- 3) 文化財研究所,「皇龍寺, 遺蹟發掘調査報告書」I, II (1983)
- 4) 東南里寺址にては塔が確認されなかったがここでは便宜上一塔一金堂寺址の部類に該當するものと記述する。
- 5) この例として公州班竹洞の大通寺がある。これに關する記述には輕部慈恩,「百濟美術」東洋美術叢刊,(東京, 宝雲舎, 1946) pp.94-97にある。ここに依ると建物址と推定される基壇址が確認され、筆者は一塔一金堂であった可能性を示唆しているがこれ以上確認されてない。
- 6) 趙 由 典, 南 時 鎮, '皇龍寺發掘調査結果報告書'「文化財」25号,(ソウル, 1992年12月) pp.165-217参照
- 7) 百濟伽藍に關する研究資料としては寺址の發掘報告書や地表調査の如き資料以外に本格的な研究結果として本論文に引用される場合以外の幾つかを羅列して見ると次のようである。秦弘燮,「百濟寺院の伽藍制度」「百濟研究」第2輯,(忠南大學校, 百濟研究所, 1971), 金正基,「百濟伽藍の特性」「馬韓百濟文化」第7輯,(圓光大學校, 馬韓百濟文化研究所, 1984), 安承周, 百濟寺址の研究「百濟文化」第16輯,(公州師範大學, 百濟文化研究所, 1985)このような研究等にも扶餘の寺址等を一つの發展過程として把握しようとする試図は見られない。
- 8) 軍守里寺址に關する一番目の報告は朝鮮遺蹟研究會,「古蹟調査報告」(京都, 1936) pp.45-55に出ている。
- 9) 東西建物址の用途に關しては,東西堂址であったと推定する場合があり筆者の論文,「三金堂形式の展開」「大韓建築學會論文集」(1990年2月)にて詳した。本論文にては重要な論題でないために論議しなかった。
- 10) 石田 茂,「扶餘に於ける百濟寺址の調査」朝鮮古蹟研究會,「古蹟調査報告」(京都, 1938) pp.36-43図版 pp.36-47
- 11) 尹 武 炳,「金剛寺」(ソウル, 國立博物館, 1969)
- 12) 尹 武 炳,「定林寺址發掘調査報告書」(大田, 忠南大學校博物館, 1981) pp.5-70
- 13) 文化財管理局文化財研究所,「彌勒寺遺蹟發掘調査報告書」(ソウル, 1989)
- 14) 「三國遺事」武王條(卷第二, 紀異第二)に出る彌勒寺の創建説話の記録から見て百濟武王代(600-641)に建立したのが確實だと考えられ張慶浩,「百濟寺刹建築」(ソウル, 藝耕出版社, 1990), pp.136-139に建立年代に對して詳しく論じてある。一方洪思俊,「彌勒寺址考」「馬韓百濟文化」創刊号(1975)にても論じていて, すべて武王元年(600)に近い時期に着工されたものと判斷された。
- 15) 配置図及び極めて簡略な紹介が「百濟金銅大香爐と石造舍利龕」という展示目録(國立大邱博物館, 1996)に紹介された。然し, この資料は公式的な調査報告ではなくて展示のために補助的な資料であった。配置図も全体

的輪廓に於いては信じられるが細部の情報まで依存し得る段階ではない。

- 16) 舍利龕の銘文は20字で次の如し。'百濟昌王十三季太歲在丁亥妹完公主供養舍利'
- 17) この表の数値は發掘報告書にでている数値による計算ではなくて, 圖面を定規で測って作った表である。そのようにすることしかできなかったのは, 報告書の回廊の数値中, 内幅と外幅が区分されていない場合があり, また数値そのものがない場合もあるからである。圖面を計って數値化することが數字上の正確度は落ちるであろうが, ここで必要とするのは使用数値の正確性ではなく, 比例的規模上の正確度でありまた相對的比較を目的とするのであるので, むしろ圖面を基準とするのは南北辺に比して變化の幅が小さいからである。東西回廊の外幅は回廊自體幅の差異が反映されるから内幅を基準にした。
- 18) このような塔と金堂の比重の變化はその背景及び建築的影響に關しては Kim, Sung-Woo,「History and Design of the early Buddhist Architecture in Korea」(The University Michigan, 1985) に詳しく論議された。
- 19) 東南里寺址は塔のない形式でなくて双塔形式であったとの提案が提示されたことがあった。藤澤一夫,「古代寺院の遺構に見る韓日の關係」,「アジア文化」(東京, アジア文化研究所, 1971)p.56に載せられていて, これに同調する記事として大川清,「扶餘の百濟時代寺院跡」,「百濟考古學」(東京, 雄山閣, 1972) pp.365-367にある。然しながら東南里寺址を初めて發掘報告した人を始めとして(石田茂, 1938) 東南里寺址に對して言及した大部分の學者達はこの可能性を否認した。發掘根拠がなく實際に双塔が位置できる空間的理由がない問題をさて置いても百濟の扶餘時代に双塔の可能性を論ずることは不可能である。7世紀後半の双塔出現以前の双塔は全然報告されたことなく, 古代佛教建築の發展過程から見てあり得ない假定である。
- 20) 軍守里寺址と東南里寺址は前掲論文にて金剛寺と定林寺及彌勒寺は發掘報告書で数値を取り陵山里寺址は配置図上の長さを測って求めた。陵山里寺址の北側回廊の幅が不明なため東西回廊の幅と同じと見做した。
- 21) ここでは, 紙面の關係上紹介されなかったが清岩里寺址より時代が先んずる定陵寺の場合塔と左右の二金堂を取り囲む回廊が横方向に長い。
- 22) 經鐘樓と推定するということはすべて發掘報告書と論文等では共通の見解であるため, 根拠を擧げる必要はない。但し, 陵山里寺址では講堂左側(西の方)の建物址が出土された遺物であると見る時に, 工房でなかったかの見解が非公式的に提起された。又似たような見解が東西回廊の北端の建築址に對しても提起された。これは報告書に依り公式に提起される前の推測であるために未だ問題視する段階ではない。今まで知られた古代佛寺建築の展開に依れば物を造る工房が回廊に接して位置するとの事實は假定し難くそうでなければならぬ必要性がよく納得されないことである。
- 23) 定林寺の場合, 講堂左右に二つの建物があつたかも知れない推測が提起されたこともあった。金正基,「韓國古代伽藍の實態と考察」,「焦雨黃嘉永博士古稀記念美術史學論叢」(ソウル, 通文館, 1988) pp.181-182に筆者と同じ論旨の内容が「馬韓百濟文化」第七輯 pp.171-177に書いてある。これは1942年當時の調査時, 建物址があつただろうと知らされたと言うが「1981年度の正武發掘調査報告書ではそれを否認している。それは高麗時代に再建された基壇積心石の下から百濟時代創建當時の土層と石材が露出されたし, ここでは經鐘樓の痕跡を採せなかったし, 回廊が講堂にまで撃がれていたと結論づけている。
- 24) この三つの建物址に對して清岩里寺址に關する初めの報告書では三つの建物址中, 東側建物址の一部が確認されたと記されている。小泉顯夫,「平壤清里廢寺址の調査」,「古蹟調査報告」(1938)小泉氏と現場にて一緒に調査した米田美代治,「韓國上代建築研究」, 申榮勳譯(ソウル, 東山出版社, 1976)p.136, 部分的には互いに異なる部分はあるが建物址があり, 三つが並んであつた確率が高かつた程度は認められることである。
- 25) 劉敦楨,「中國古代建築史」,(北京, 中國建築工業出版社, 1980)p.81以外に三朝制度に關する記録は多數採がし出せる。例えば, 三朝制度の源流的根拠を「周禮考工記」を中心に記述したものは賀業鉅,「考工記營國制度研究」(中國建築工業出版社, 1985)の cp.3 宮城計劃が抜きでる。李允鉄,「華夏意匠」,(香港, 華風書局, 1982)p.93にも簡略な説明が出てくる。
- 26) 講堂と經鐘樓の變化順序にては個別寺址の順序が確認されない部分を塔と回廊について年代順序を反映して記録した。

(1997年5月10日原稿受理, 1998年3月3日採用決定)